

Contents

- ・副会長挨拶
- ・学会報告
- ・Transmitter(essay)
温故知新
前程万里
- ・新評議員挨拶
- ・事務局だより
- ・編集後記

JSVN Letter

Volume 3
October 1, 2019

副会長挨拶

獣医神経病学会副会長
相川武(相川動物医療センター)

神経病学会の副会長として少しお手伝いをさせて頂いております。

1993年本会発足当時、私は卒業後2年目で、興味を持っていた本学会に入会し、当時の上司、長江先生のお勧めもあり人生初の学会発表の機会を頂きました。脳髄膜腫症例の診断の為に脳神経学的検査、CT検査、EEG検査、脳の病理解剖などを織間先生、渡辺直之先生にもご教授頂き、当時の自分にとっては全てが新鮮で貴重な体験でした。

3年間の代診生活を終え、かねてから目標にしていた米国留学の際に、ノースカロライナ大学でNick Sharp教授と出会い、神経外科研修医として約1年間、毎日のように脊椎の手術をさせて頂いた経験が自分の外科医としてのスタートでした。同時期にお世話になったKaren Munana教授には今でも論文作成の際にご助言を頂いています。2013年の本学会20周年記念講演に招待し、更に御家族にも東京や富士五湖を御案内できたことも本学会のおかげと感謝しております。

本学会では多くの優秀な会員が各分野で活発な研究活動、国際的ジャーナルへの投稿を実践し、共通の価値観を持つことは素晴らしいことです。会員間の隔たりのない、和気あいあいと意見を交わし合える本会の特徴を大切にし、より楽しい会にしていけたらと思います。



恩師Karen Munana教授と
第20回神経病学会会場にて



学会報告

第45回 獣医神経病学会2019(東京大会)を終えて

大会長 日本大学 北川勝人

去る2019年6月29-30日に東京お茶の水ソラシティカンファレンスセンターで第45回獣医神経病学会が開催されました。東京での開催ということもあり200名近い多くの先生に参加して頂きました。開催にあたっては、関係者の方々にご尽力、ご支援を賜ったことを深謝いたします。今大会運営を振り返り、主項目を簡単に報告致します。

今回は鹿児島大学の大和先生による遺伝病、久我山病院の山田先生には脳脊髄液循環の新しい概念、そして日本獣医生命科学大学の長谷川先生にはてんかん外科の講演をして頂き、非常に反響が大きいものとなりました。また北川から現在進行しているアジア獣医内科学会における神経病専門医に関する現状を報告させて頂きました。発表演題は8題あり、脳腫瘍からてんかん外科に関するものまで幅広い分野の発表で、非常に活発な意見交換が行われました。基礎講習は神経検査の内容で行われ、例年のごとく多くの若手の先生方が参加しました。

1日目の夜に開催された懇親会においても多数の先生方に参加していただきました。特に多くの若い先生が参加されており、懇親会も含め盛り上がった学会になったと思います。



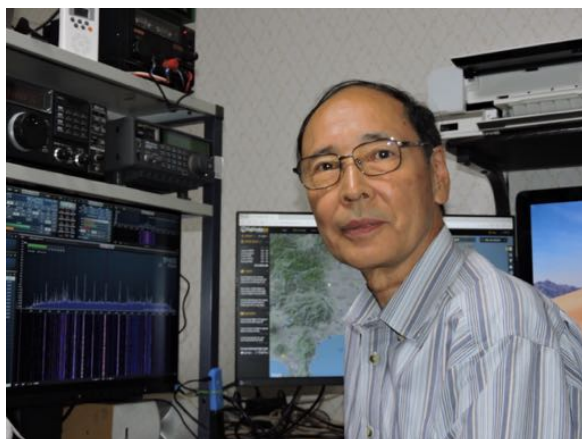
「神経病と私」

温故知新

織間博光 株式会社ORM神経病・読影センター

私の趣味の一つは電子工作で、中学の頃はラジオの製作に夢中でした。当時は真空管が全盛で、よく使う真空管の名称は勿論、規格まで暗記していたので、仲間からは“歩く真空管規格表”と呼ばれ重宝がられていました。しかし、世の中の進歩はすさまじく、真空管はあっという間にトランジスタ、そしてICに取って代われ、歩く真空管規格表の出番は全くなくなりました。

その後、かなりの年月が経ってからの大学教員時代にUC Davisに行く機会があり、そこで神経病の部位診断の講義を受けました。その講義の際、神経病の診断のしかたや考え方がラジオの故障箇所の発見とよく似ていることに気づき、それがきっかけで神経病に興味を持つようになりました。ラジオの修理は故障の状態から回路図をたどり、原因部品や断線部位を探し出します。中学、高校と勉強もせず、電子工作にハマっていたのですが、そのときに培った故障箇所を発見する考え方が現在の神経病の診断に役立っているのは間違いなくと思っています。単なる暗記は時代が変われば使えなくなることが多いですが、考える力は時代や対象が変わっても使えます。若い時代に考える力をつけておくことは大切なことだと思います。



Transmitter 第3回

前程万里

「ランニングマン・セオリー」

長谷川裕基 KyotoAR獣医神経病センター

去る2019年6月末、獣医神経病学会に参加し、非常に有意義な時間を過ごすことができました。勿論、学問的な意味合いが大きいのですが、私はランニングが趣味であり、旅先で走ることも楽しみとしています。今回は会場が近かったため、市民ランナー憧れ(?)の皇居ランを行い、フレッシュな状態で学会参加できました。

さて、ランニングはポピュラーなスポーツですが、ランニングをしない方からは、なぜ走るのか分からないという意見も耳にします。様々な魅力がありますが、ランニングを題材にしたノンフィクション本、「Born to Run」の28章で興味深い記述がありました。ヒトは長距離を走るために、アキレス腱や臀筋を発達させたそうです。更に、項靱帯は馬や犬の様な長距離を走る動物に搭載された、走るための装置という側面もあるとのこと。これらを含めた様々な解剖学的・生理学的特徴から、ヒトは走るために進化し、走ることが自然であるという「ランニングマン・セオリー」が説かれていました。詳しくは「Born to Run」や、本に登場する生物学者

Dr. Dennis M. Brambleの論文(*Nature* 432, 345-352, 2004)をご覧ください。

動物のロコモーションを研究・治療対象の一つとしている我々にとってランニングは最適なスポーツなのかもしれません。皆さまも来年の沖縄での学会までに、ランニングを始めてみてはいかがでしょうか？



北海道大学 獣医内科学教室 大田寛

2018年6月より獣医神経病学会の評議委員に加えていただきました北海道大学の田田寛です。私は麻布大学を卒業後、北海道大学の大学院に進学し、縁がありまして2007年より北大の獣医内科学教室の助教に着任いたしました。その後、2014年より同教室の講師を拝命して現在に至ります。私が助教に着任した当初は、内科診療全般を担当しておりましたが、現在は神経科と消化器科を主に担当しております。私が助教として着任する少し前に、北大の動物病院にもMRIが導入され、私がMRIを主として担当することになったことが神経病の世界に入る大きなきっかけとなりました。導入当時は0.2Tの機器で故障にもよく悩まされましたが、2010年より0.4TのMRIが導入され、約10年間北大の神経疾患の診断に貢献してくれました。私は所属教室の名の通りの内科医で

すので、外科手術で動物を治すことは出来ないのですが、様々な内科疾患を担当してきた目線から神経病学会に貢献していければと考えております。それを後押ししてくれるように、当院でもいよいよ3TのMRI装置を導入することとなりました。また、最近、神経内科担当、画像診断担当、整形・神経外科担当の各一名の助教が新たに加わり、北大神経科もチームと呼べる規模になってきた感があります。このチームと新たな機器で神経内科領域に貢献出来る研究を展開していきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



10年近く働いてくれたMRIの最終稼働日に関連スタッフで開いたお別れ会の写真です。色々持ち込んでいますが安全には配慮しています。写真の左から2番目が著者です。

事務局から

冬期基礎講習会のお知らせ

今年は冬の基礎講習会を開催します。学会の時には聴講できない先生方もお時間がありましたら、ご参加ください。

日時: 2019年12月1日(日) 10:00～

場所: 東京大学 中島記念ホール

参加費: 3,000円

継続受講されている先生は「基礎講習会受講証」をお持ちください。

内容: 基礎講習プログラム8 「脳脊髄液検査」	枝村一弥 先生
基礎講習プログラム9 「電気生理学的検査」	金園晨一 先生
基礎講習プログラム10 「画像診断」	長谷川大輔 先生
基礎講習プログラム11 「臨床薬理」	折戸謙介 先生

また、獣医内科学アカデミー(JCVM)でも基礎講習会を開催します。

日時: 2020年2月23日(日) 午後

内容: 基礎講習プログラム8 「脳脊髄液検査」 枝村一弥 先生

編集後記

執筆をいただきました先生方に厚く御礼申し上げます。文章はもちろんですが、個性が感じられる楽しい写真も送っていただきました。おかげさまで楽しく編集作業ができました。今後はさらにいいものをお届けしたいと思っていますので、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。宜しくお願い致します。

編集長: 宇塚雄次

編集委員: 宇津木真一 小澤剛 チェンバーズ・ジェームス 和田昌絵

ご意見窓口: 小澤(ozvet@k9.dion.ne.jp)